

焼岳の火山活動解説資料

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

<噴火警戒レベル1（活火山であることに留意）が継続>

3日14時頃から山頂付近を震源とする微小な火山性地震が増加しています。

GNSS連続観測では、中長期的に山頂付近で緩やかな膨張を示すと考えられる変化が続いています。

今後、火山性地震がさらに増加した場合、噴火警戒レベル引上げの可能性があります。今後の火山活動の推移に注意してください。

防災上の警戒事項等：

山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。

○ 活動概況

・地震の発生状況（図1、図2）

3日14時頃から山頂付近を震源とする微小な火山性地震が増加しています。

・噴気など表面現象の状況（図3、図5）

噴気活動に特段の変化はありません。

・地殻変動の状況（図4、図6、図7）

GNSS連続観測では、一部の基線で山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化が継続しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、京都大学、名古屋大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

時別回数

1日からの
合計回数

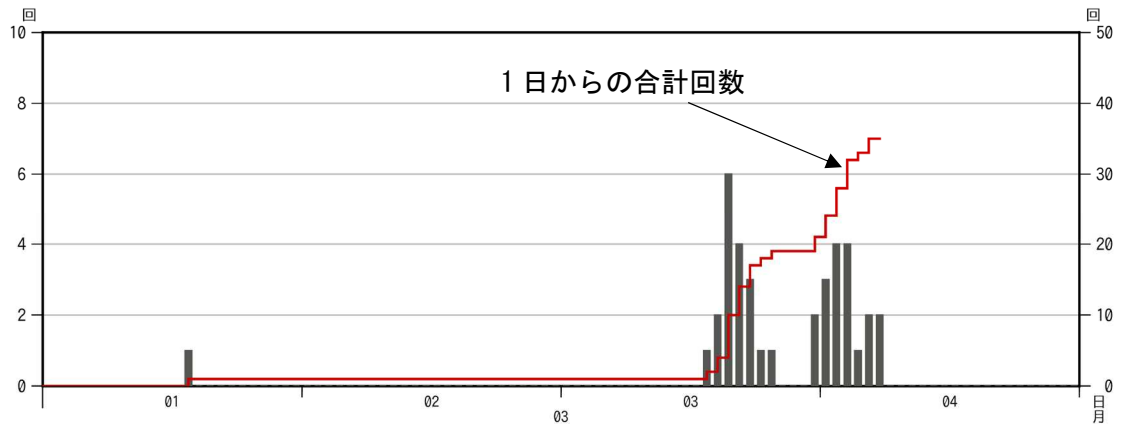


図1 焼岳 山頂付近の時別及び1日からの合計地震回数
(2025年3月1日～4日06時まで)

- ・ 3日14時頃から山頂付近を震源とする微小な地震が増加しています。
- ・ 火山性微動は観測されていません。

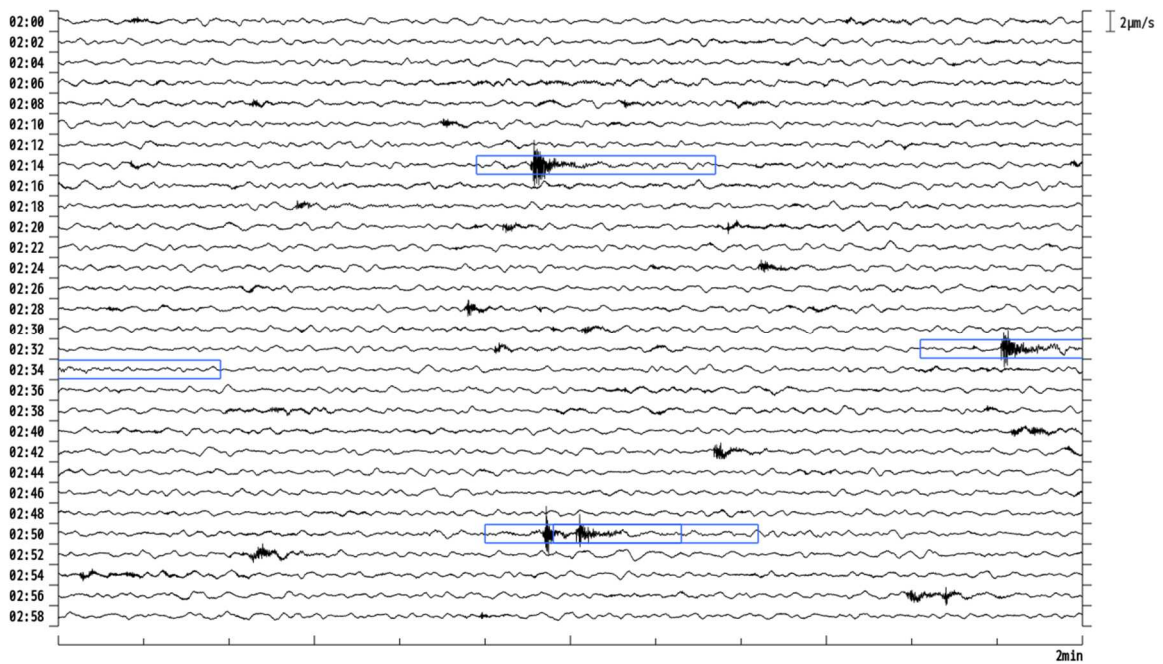


図2 焼岳 本日（4日）02時台に観測された火山性地震

南峰南東観測点の広帯域地震計で観測された上下動の速度波形を示しています。

- ・ 山頂付近を震源とする微小な火山性地震が発生しています。

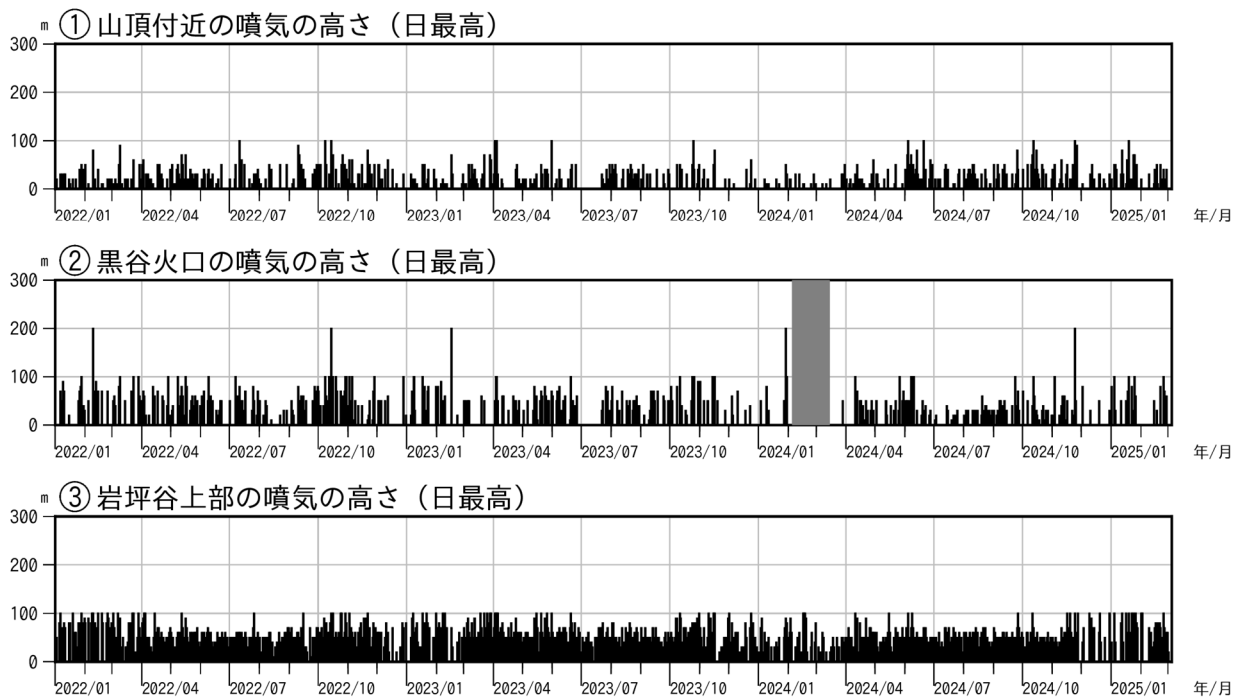


図 3-1 焼岳 噴気の高さの推移（2022年1月1日～2025年3月3日）

黒谷火口の噴気の高さは、2024年2月5日から3月14日にかけて、障害のため欠測です（灰色の期間）。

- ・ 噴気活動には特段の変化は認められません。



（○は気象庁、●は京都大学の観測点を示しています）

図 3-2 焼岳 噴気孔位置（青丸）

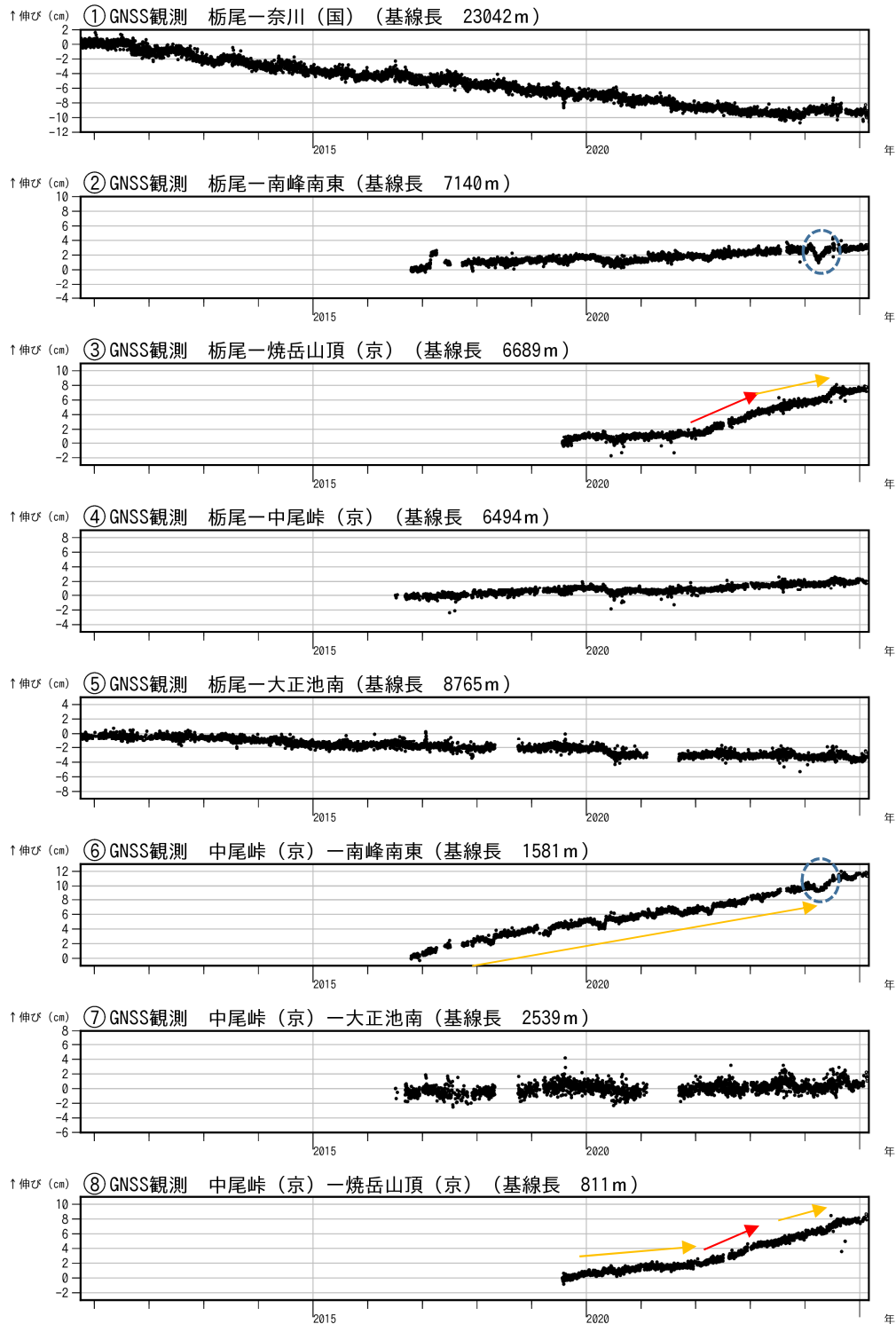


図4 焼岳 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月1日～2025年3月3日）

図5のGNSS基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（国）は国土地理院、（京）は京都大学の観測点です。②と⑥の基線では、2024年3月頃から縮みの傾向が、また、5月頃からは伸びの傾向がみられますが、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと思われます（青点線丸印）。

- ・⑥と⑧の基線では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化が継続しています（赤及び橙矢印）。
- ・③と⑧の基線では、2022年1月頃から焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられていましたが（赤矢印）、2023年2月頃より伸びの変化が鈍化しています（橙矢印）。

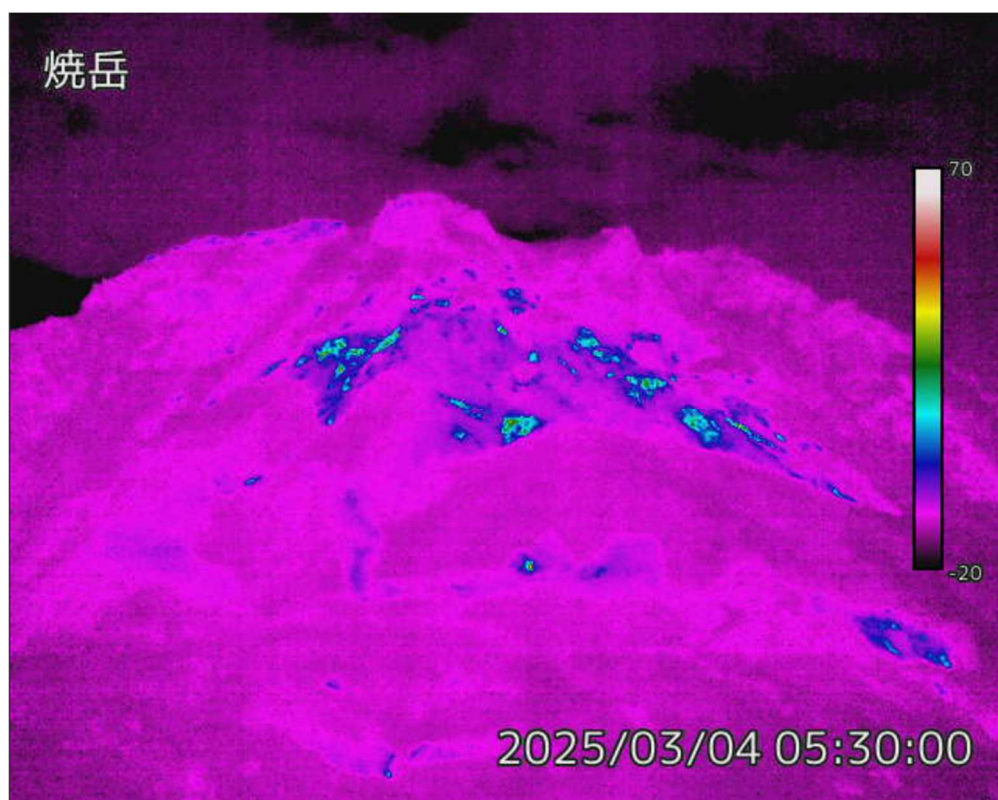


図5 焼岳 中尾峠の監視カメラによる噴煙の状況
上段：可視カメラ、下段：赤外カメラ（4日05時30分）

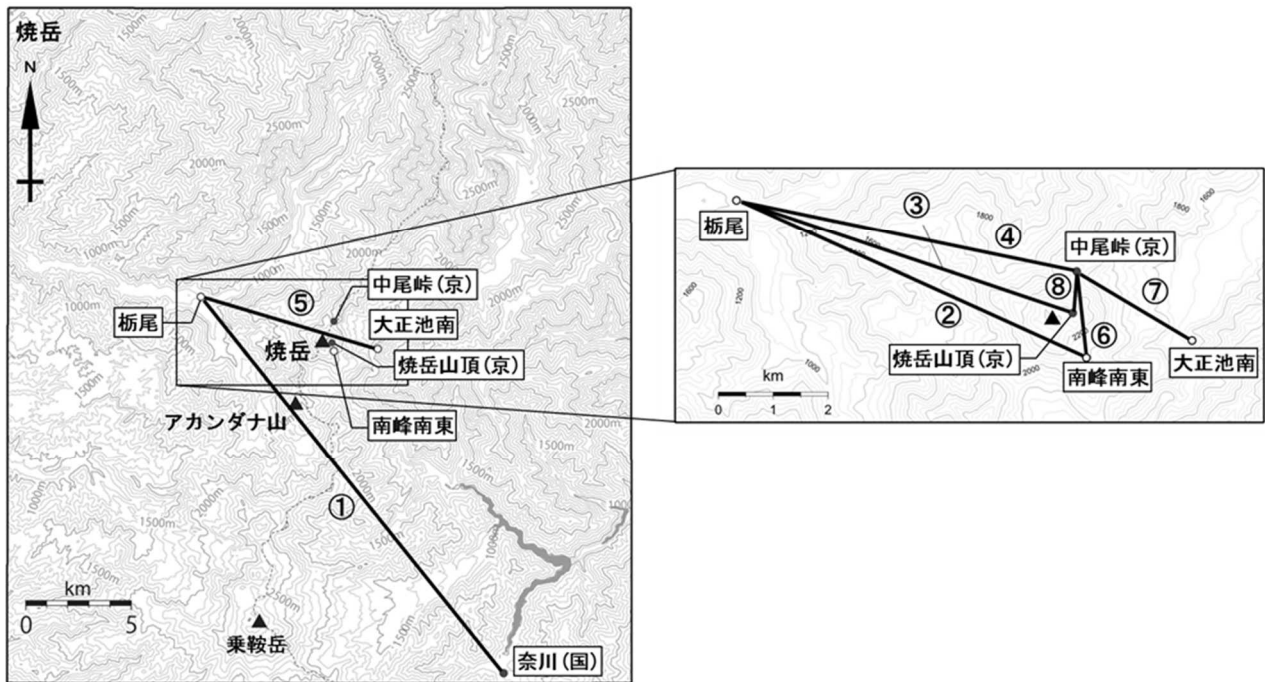


図6 焼岳 GNSS 連続観測点配置

白丸(○)は気象庁、黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

①～⑧は図4のGNSS基線①～⑧に対応しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学

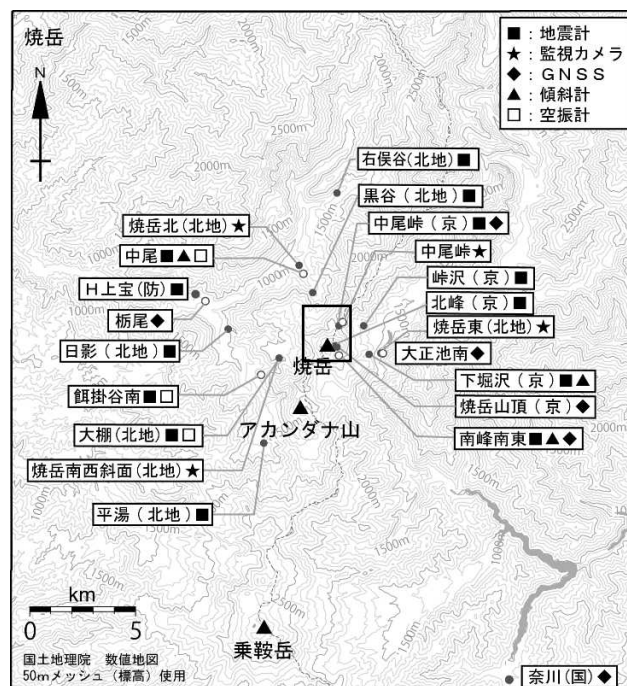


図7 焼岳 観測点配置及図

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所、(京)：京都大学、(北地)：北陸地方整備局